

まつもと り  
松本 瑠里さん  
(若松町)

○プロフィール  
山田養蜂場主催ミツバチの絵本コンクール・イラスト部門において最優秀賞を受賞



# キラリ★話題の「ひと」

## ターシャ・テューダーに憧れて

ミ ツバチのお医者さまが、お尻の針を使って患者さんの治療をする病院が舞台の絵本「ここにこブブン」ことクリニク」。この絵本は山田養蜂場主催によるコンクールにおいて、ストーリー部門で最優秀賞に選ばれた文章にイラスト部門で同じく最優秀賞を受賞した松本瑠里さんのさし絵で作成されました。

「ストーリーから見えないものを想像して絵にしていって作業が楽しかったです」と話す松本さんの絵は、水彩画による温かくやわらかいタッチが魅力的です。登場人物や背景などの設定が細やかに表現されている点も審査の高評価に繋がったそう。ミツバチの先生は少しお年を召した優しいような女医さんで、診察室の薬棚は蜂の巣モチーフの六角形。漢方薬を思わせるような描写もあります。本筋以外の何気ないシーンが描かれているのも遊び心の一つ。

高校生のころから漫画を描いたりお話を考えることが好きだった松本さんは、ある時ターシャ・テューダーの「コーギービルの村

まつり」という絵本に出会い、ご自分も絵本作家になりたいという夢を抱え美術大学に進学。絵本の編集者でもある教授の元で本の構造や書き方を学び、出版にも関わりました。

こちらの絵本は、通常はネット販売と寄贈での配布ですが、ご主人のご実家である永楽屋書店では店頭購入が可能です。売上げの一部はユニセフを通じてウクライナ支援に使われるとのこと。また、市内の保育園と小学校には寄贈もされたそうです。

秋には県内の作家さん達による「いちご会」のグループ展への出展を控え、イラストを制作中。昨年ご出産された双子のお子さんに絵本を読んでもらうと、キラキラした目で聞いてくれるそうで「絵だけでも親子で楽しめるような物語を描いてみたいです」と話してくださいました。

(市民記者 小林春美)



▲絵本の表紙

## 市長からのメッセージ

先月、小中学校を訪問し、1人1台端末(パソコン)を活用した授業を見てきました。市では、昨年度、1人1台端末を全小・中・義務教育学校に整備し、端末を活用した授業づくりを進めております。授業では、端末で利用できる共同学習支援アプリやプログラミング教材、プレゼンテーションアプリを活用して、児童生徒が意欲的に学習に取り組んでいました。端末を活用することで、児童生徒が主体的に考えたり、自分の考えを友達と共有し、自信をもって発表したりする姿が随所に見られ大変感動いたしました。

さて、6月は梅雨入りの季節です。先月から天気が崩れる日も多くなりました。6月下旬ごろは梅雨前線の活動が活発化し、大雨に警戒が必要となることもあります。配布してあるハザードマップを再度ご家族で見直し、避難先や危険箇所などの確認をお願いします。

梅雨が明ければ暑い夏がやってきます。市役所3階、4階にあるテラスを昨年からは市民の皆さまに開放し、休憩できるスペースとしました。春ごろから、お茶を飲んで休憩している市民の方や勉強している高校生など、利用も増えてきております。テラスの占有利用も可能となりますので、夏のイベントやシニアの活動などにも活用をぜひご検討ください。利用には少し条件もありますので、確認したい方は財産活用課☎(20)3050へご相談ください。しばらく梅雨空が続きます。体調管理に充分気を付け充実した毎日を送りましょう。



金子裕 ▲3階テラスの様子

今回の表紙 「クマガイソウの群生」 令和4年4月25日撮影

「五丈の滝前植物園」(水木町)では、4月下旬~5月上旬になると、環境省のレッドリストにも掲載されている貴重なクマガイソウの群生を見ることができます。





## 佐野市の展望台 「浅間山」

**佐**野市奈良淵町にある浅間山は、登り下り合わせて1時間程度で登れる山です。標高は181m、山頂からは最高の展望が得られます。北側は唐沢山があるので遮られるものの東は筑波山から日光連山までほぼ360度を見晴らすことができます。この山は浅間の火祭でも有名で、7月下旬には山頂からたいまつ行列が行われます（佐野市指定無形文化財）。名前から分かるように富士山信仰の山であり浅間神社が山頂に祭られています。麓こまつの小叢神社とともに山麓の方々の信仰の山で、小叢神社からの2コースと唐沢山への車道からの登山道があります。四季を通して登れる山で、毎日登る方もいるとか。ただし、車の場合、駐車場はないのでご注意ください。



▲山頂の浅間神社

（市民記者 福田満）

## 高崎経済大学学生が佐野らーめん予備校に関する提案を発表しました

**高**崎経済大学地域政策学部・岩崎忠教授のゼミでは、佐野市が抱える地域課題を研究やゼミのテーマとして取り扱っていただいています。令和3年度は、同教授のゼミ7期生の皆さんに、佐野らーめん予備校の自走化について研究していただきました。その結果を発表するプレゼンテーションが、4月23日(土)に市民活動スペースで行われました。



▲高崎経済大学の学生による発表の様子

学生さんたちからは、イベント型や体験型など、さまざまな切り口で資金調達、リピーター確保、知名度向上などについて、具体的なアイデアをご提案いただきました。

葬式の引き物には、大きな饅頭まんじゅうを添えて振る舞うのが慣例となっています。この饅頭を「ジャンボンマンジュウ」といい、子どもたちには特に人気がありました。昭和20年代は食糧難だったので、ジャンボンマンジュウは貴重な食べ物でした。ジャンボンには、シレーマンマ（米のご飯）が食べられるという楽しみもありました。

ところで、葬式をなぜジャンボンとかジャーパーボなどというのでしょうか。

銅製で皿型をした打楽器の真ん中にひもをつけ、お坊さんがこれを両手に一つずつ持って合わせて打ち鳴らします。その音がジャンボンと聞こえたので、葬式をジャンボンというようになりました。高い音のする饞にょうと鉦かねを葬式の打楽器として用いました。

（市民記者 森下喜一）

佐野弁  
ばんてい

葬式にお坊さんのたたいた饞と鉦の音が  
ジャンボンと聞こえた

死者をほうむる儀式を葬式といいます。方言では葬式を「ジャンボン」といい、これ以外にジャンボ・ジャーパーボ・ジャボなどともいいました。昭和の中頃までは土葬も多く、葬式はジャンボンというのが普通でした。では、ジャンボンにまつわる方言などを挙げてみましょう。

近所に死人が出ると、組合内の人は死人の親戚の家を訪ね、そのいきさつを報告します。報告する人を「悲悼ひたう」といいます。方言では「ジャボビト」といいます。またジャンボンに結びつくことば（複合語）に、アナマワリがあります。これは親戚一同が庭で輪をつくり、中央に安置した棺ひつぎの周りを三周半左に回ります。これを別名「ジャンボンメグリ」といいます。

